

Ⅲ 授業研究

【授業研究1】

小学校第1学年「規則正しい生活」における道徳資料の開発と活用の在り方

古河市立古河第七小学校 教諭 永井行男

1 資料開発にあたって

(1) 題材の設定

小学校の低学年では、まだまだ人間関係をうまく調整することができず、しばしば集団生活の中でわがままな行動をしてしまう子どもを見受ける。そのような時期だけにわがままをしないで、規則正しい生活をする態度を育てる必要がある。

そこで、子どもたちの日常生活を振り返らせながら、具体的事例を通し、集団の中で節度ある生活をする事、人のいやがることをしないことや迷惑をかけないことが、いかに大切であるかを十分に考えさせたい。

(2) 素材の収集

「規則正しい生活」という価値項目に関して、次の視点から収集する。

- ・ 子どもの日常生活
- ・ 家庭との連絡帳
- ・ 学級ノート
- ・ 学級懇談
- ・ 作文
- ・ 班ノート

本資料の素材の収集を、子どもの夏休みの生活の中に求めた。夏休みは、学校という集団生活から解き放たれるために、規則正しい生活をするといった行動がとれなくなることが多い。たとえば、ラジオ体操などは子供会で主催していることもあって、登校時のようには朝早く起きることができない。お母さんや家の人に起こされ、やっと参加する子ども、とうとう起きられず参加できなかった子どもたちがいることも事実であり「規則正しい生活」を考えさせる素材としては十分である。

本資料では、しゅんの気持ちに共感するとともに、みんなと生活をするためには、まず自分自身が規則正しい生活をする事が大切であることを、みんなで考えられるようにした。

(3) 文章化

次の3つの場面から構成する。

ア お母さんが起こしているにもかかわらず、しゅん君が寝ている場面。

イ しゅん君が、夢中で追いかけていく途中、石につまずいてけがをする場面。

ウ お母さんに手当してもらっているところに、りょう君たちが寄ってくれた場面。

(ア) 中心となる価値の明確化 1-(1) 節度・節制、自立

(イ) 中心場面 (主人公の気持ちが集約)

(ウ) 題名 (日常的なもの)

(エ) 文章化 (平易、簡潔)

2 授業の実践

(1) 資料の分析表

学 年	1学年	主題名	規則正しい生活 1-(1)	資料名	ラジオたいそう	出 典		自作資料	
ねらい	健康や安全に気をつけ、身の回りを整え規則正しい生活をしようとする態度を育てる。			事前指導の工夫	日常生活アンケートから実態を把握する。				
評価の工夫	作文による方法			事後指導の工夫	時間を守って行動していることは大いに賞賛する。				
補助資料等	[導入] 夏休みの目標 [展開] ラジオ体操のテープ・参加カード [終末] 教師の説話								
話のすじ (資料に含まれる価値)	価値に迫る人物の言動心の動き			○基本発問	予想される反応				
	中心人物の言動と心の動き	関連人物の言動と心の動き		●中心発問					
1 りょうが迎えに来てくれたのにしゅんは夜遅くまでテレビを見ていたので起きられない(規則正しい生活1-(1))	・もう少し寝ていたいよ。	・迷惑をかけると悪いので、早く起きてほしい(お母さん、おねえさん)		○おねえさんやお母さんに起こされている時、しゅんはどんなことを考えたか。	・もう少し寝ていたい。 ・りょう君を待たせるのは悪い。 ・うるさいな。				
2 りょうは急いで会場に向かう。		・今日こそは遅れないでラジオ体操に参加したい。(りょう) ・しゅんはもうすこし早く起きて欲しい。(りょう)		○りょう君はどんな気持ちでラジオ体操の場所まで走って行ったか。	・ラジオ体操に遅れたら大変だ。 ・起きないのはだらしない。 ・一緒に行きたかった。				
3 しゅんははっとして起き出し、眠い目をこすりながら、夢中で走って行った。	・今日こそは遅刻しないで参加したい。								
4 石ころにつまずいてころび、ひざに血をにじませた。	・痛いなあ、こん所に石があって ・早く起きていればこんなことにならなかった。			○左ひざが血でにじんでいたのを見て、しゅんはどんなことを考えたか。	・もっと早く起きると良かった。 ・遅くまでテレビを見ていたのが悪かった。 ・急いだのが悪かった。				
5 お母さんに治療してもらっているところにりょう達が寄ってくれた。(思いやり3-(2))		・ラジオ体操は楽しかったなあ。 ・しゅんはどうしてこなかったのだろう。							
6 みんなが心配そうに声をかけてくれたが、しゅんは下を向いているだけだった。(節度ある生活1-(2))	・夜遅くまでテレビを見ていなければラジオ体操にも参加できたし、こんな目にも会わなかったのに。			○下をむいていたしゅんは、どんなことを考えていたか。	・みんなのしそうなのに、なぜぼくだけこんな目にかうのか ・遅くまでテレビを見ていたのが悪かった。 ・これからは規則正しい生活をしよう。				

(2) 指導案
展開

主な活動と発問	予想される児童の反応	教師の働きかけ 評価
<p>1 夏休み中の生活はどうだったか、話し合う。</p> <p>2 資料「ラジオ体操」を聞いて話し合う。</p> <p>○ お母さんに起こされている時、しゅんはどんなことを考えたか。</p> <p>○ 左ひざが血でにじんでいたのを見て、しゅんはどんなことを考えたか。</p> <p>○ 下を向いていたしゅんは、どんなことを考えていたか。</p> <p>3 今までの生活を振り返って話し合う。</p> <p>○ 規則正しい生活をしてよかったなあと思ったのはどんなときですか。</p> <p>4 教師の話聞く。</p>	<p>・だらけた。</p> <p>・お母さんにしかられた。</p> <p>・目覚し時計で起きた。</p> <p>・夜遅くまで起きていた。</p> <p>・もう少し寝ていたい。</p> <p>・りょう君に待たせるのは悪いなあ。</p> <p>・早く起きないとラジオ体操に遅れる。</p> <p>・うるさいなあ。</p> <p>・痛いなあ、こんな所に石があつて。</p> <p>・早く起きていれば、こんなことがなかったのに。</p> <p>・急いだからいけなかった。</p> <p>・遅くまでテレビを見なければよかった。</p> <p>・どうして自分だけが。</p> <p>・みんなと一緒にいきたい。</p> <p>・自分が悲しい。</p> <p>・りょう君たちの気持ちがうれしい。</p> <p>・みんなに悪いなあ。</p> <p>・早起きして家の人にほめられた。</p> <p>・ピアノの練習の約束を守って先生にほめられた。</p> <p>・夏休み、水泳教室にずっと続けて通ったので少し泳げるようになってよかった。</p>	<p>・夏休み中の生活を思い出させねらいとする価値への方向づけをする。</p> <p>・りょう君へ迷惑をかけてしまうという気持ちよりももう少し寝ていたいという人間の弱さに気づかせたい。</p> <p>(評) しゅんの気持ちに共感することができたか。</p> <p>・意図的指名をして話し合いを深めたい。</p> <p>・思いやりなどねらいとする価値からはずれる意見も出ることが予想されるので規則正しい生活(1-(1))に焦点化する。</p> <p>・役割演技をさせ、しゅんの考えていることを分からせる。</p> <p>・生活のさまざまな場面で規則正しい生活をしてよかったことを思い出させるように働きかける。</p> <p>(評) 規則正しい生活をするこのよさをいろいろな生活場面に広げることができたか。</p> <p>・余韻を残して終る。</p>

(3) 授業分析

ア 児童の記述や発言メモをもとにした分析

授業前の児童の3段階への位置付けは、「規則正しい生活」に関する意識調査の結果による。

児童一人一人の道徳意識に対する変容については、発言メモワークシートに記述された内容から判断した。

授業前の段階に比べて上の段階に変容した児童が多くなった。

特に、中心発問のところでの変容児童数が一番多くなっている。これは、資料内容を自分の問題としてとら

えることができ、教師の中心発問によってより深い自己との対話ができただためと思われる。

一方、意識の変容があまり見られなかった児童がいる。これらの児童に対しては、心をさらに揺さぶる資料の改善や開発が必要であり、教師の発問等指導過程についても工夫していく必要がある。

イ 児童の自己評価からみる変容

授業前、授業後の意識調査により道徳性の変容をとらえた。

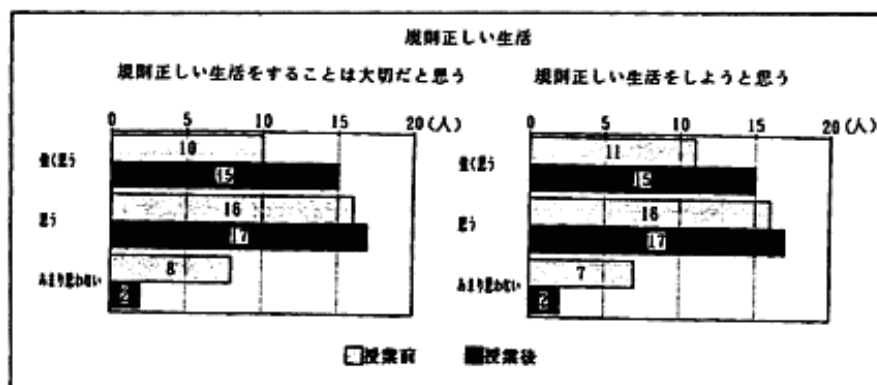
「みんなに迷惑をかけないことは大切だ、みんなに迷惑かけないようにしよう」という意識はあるものの現実の「朝早く起きる」ことに対しては、意識が低い。

これは、言葉では分かっているものの現実にはなかなか実行できないことの表れといえる。

段階	評価観点	児童数	変容過程			児童数
			資料	中心発問	価値の一般化	
III	わらいとす価値について気付き、実践しようとする意欲が高まっている。	(6人) 20 18 9 30 2 15				(14人)
II	わらいとす価値に気付いている。	(15人) 12 23 21 12 8 6 14 17 27 19 25 25 22 22 10				(18人)
I	感情のみを述べている。	(13人) 5 11 2 19 3 4 4 2 2 3 3 6 1 7				(7人)

(児童数の数字1~34は児童の番号を示すが、出席番号ではない。)

図1 道徳意識の変容度 (平8.9.20期 1年1組34人)



意識の変容結果から授業後は、資料内容を自分の問題としてとらえることができ、自己を深く見つめることで、実際にどうするかという意識が高まったといえる。

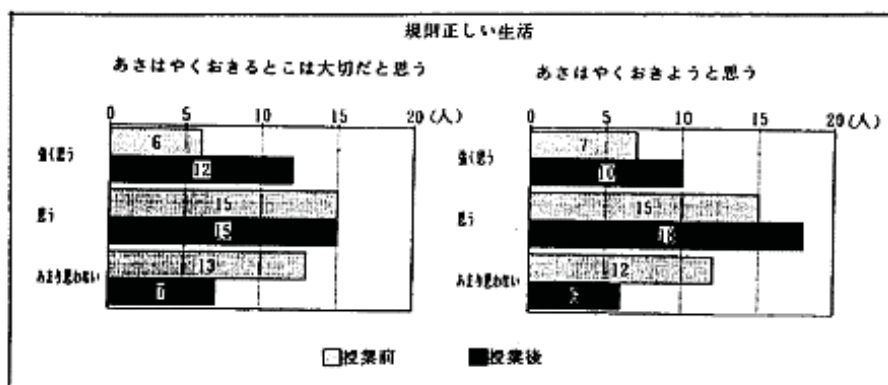


図2 規則正しい生活に対する意識の変容
(授業前 平8. 9. 13 授業後 平8. 9. 20実施 1年1組34人)

ウ 児童による資料評価

授業が終わってから、資料について当てはまる項目を選ばせた結果が表1である資料内容については「自分も、夏休み同じようなことがあった。」等の感想が多かった。

話の内容が身近であればあるほど、資料をとおして自分自身を深く見つめることができたと考えられる。

表1 資料内容に対する児童の感想 (平8. 9. 20実施 1年1組34人)

《どんなお話だったので》	《どうだったか》
話がよく分かったので (6)	もっとたくさん話がしたかった (6)
話がよく分からなかったので	もう話し合うのはいやだ
前に同じようなことがあったので (20)	心に残る話だった (7)
今までになかったことなので	心に残らない話だった
いいお話なので (5)	楽しかった (6)
あまりよくないお話だったので	つまらなかった
これからもあるかもしれないので (3)	ためになった (15)
こんなことはないと思うので	ためにならなかった

3 成果と課題

(1) 成果

- 児童の身近な生活の例をもとにした自作資料は、児童一人一人に自分自身の問題として十分に受けとめさせることができ、より深く自己を見つめさせることができた。

(2) 課題

- 小学校低学年における道徳授業の客観的な評価方法について研究を進めたい。
- 道徳の時間に高められた道徳的実践力が、日常生活の中の道徳的実践にどのように結びついていくのかを究明したい。

【授業研究 2】

小学校第2学年「公德心、規則の尊重」における道德資料の開発と活用の在り方

大宮町立世喜小学校 教諭 柏 容子

1 資料開発にあたって

(1) 題材の選定

「公德心や社会規範を守る」ことは、社会生活の中で必要な心がけである。みんなが快く生活するためには、人々にいやな気持ちを与えないように努めなければならない。

しかし、小学校低学年は、発達段階からみても自己中心的で自分勝手な行動をとることが多い。自分の立場を主張するあまり、他人の立場に立って物事を考えることが難しい傾向にもある。また、物の取り扱いも無責任な方向になりがちである。

このような状況に対して、日常生活の中でおこる様々な問題を、自分自身の問題としてとらえさせることが大切である。

そこで、日常生活における身近なできごとを児童の実態にあった資料開発にすれば、自我関与も容易にでき、道德的価値把握となる自己との対話を豊かにできると考える。

具体的な事例を通して自分を取り巻く人々との関係を大切にし、自分だけの生活にとどまらず、よりよく生きるための公德心やきまりを守る精神を養っていきたい。

(2) 素材の収集

取り扱う価値項目ごとに、日常、共感や感動をおぼえるものを収集しておく。

- ・児童の観察
- ・児童の日記や作文
- ・新聞やニュース
- ・児童の家庭の様子
- ・教師の経験

本資料は、「児童の家庭の様子」や「教師の経験」から素材を選択した。医院の待合室で子どもたちが本を読んだり、ゲームをしたりして順番を待っているという光景をよく目にする。「歯医者さんと弟と一緒に」という身近なできごとは、すぐに想起できる場面である。

「パズルで楽しむ」についても、大部分の子どもたちは今までパズルで遊んだ経験もあり自分の問題として考えることも容易である。「パズルのピース不足」という設定によって、ため息をつきたくなった主人公の感情に共感できるようにし、みんなが使う物を大切に扱う心を育てていきたい。

(3) 文章化

次の四つの場面を構成した。

- ア 歯医者さんの待合室で順番を待つ場面
- イ パズルをする楽しさが表れた場面
- ウ パズルのピースがなくて不安な場面
- エ 主人公が落胆した場面

前半（ア、イ）は主人公の楽しさ、後半（ウ、エ）は、不満というように心境の変化を大きくすることによって、なぜ変わったのかを児童の判断に訴えるようにした。

アで、本やパズルが乱雑にあるという事実を伏線にし、「ピースがない」と分かったときの主人公の落胆した気持ちをとらえられるようにした。

エを中心場面として、主人公の気持ちや考えを集約した。弟がため息をつき、自分も「あーあ。」と言いたくなったという表現によって、主人公への共感を深め、ねらいとする価値が理解できるようにした。

2 授業の実践

(1) 資料の分析表

学年	2 学年	主題名	たいせつにする心 4-(1)	資料名	たりないパズル	出典	自作資料
ねらい	みんなが使う物を大切にし、約束やきまりを守ろうとする態度を育てる。		事前指導の工夫	道徳の時間、体験をもとに話し合いができるよう、公共物を扱う場面やきまりを守ろうとする場面を意図的に設定する。また、日常観察より児童の実態を把握して意図的指名ができるようにする。			
評価の工夫	小集団での話し合い、役割演技、ワークシートへの記入など多様な表現方法を取り入れ、自分の言葉で語ることのできる機会を設ける。		事後指導の工夫	「たりないパズル」の絵を掲示して意識の高揚を図る。公共物を大切に場面、随時賞賛する。学年通信を活用して、家庭との連携を図る。			
補助資料等	[導入] 待合室の雰囲気作り [展開] 場面絵 未完成のパズル(前段) [終末] 教師の話 公共物を大切にしようという体験資料(後段)						
話のすじ 資料に含まれる価値	価値に迫る人物の言動と心の動き		○ 基本発問 ◎ 中心発問		予想される反応		
	中心人物の言動と心の動き	関連人物の言動と心の動き					
1 あゆみは、歯医者さんの待合室で絵本やパズルを見つけた。 (公徳心規則尊重 4-(1))	<ul style="list-style-type: none"> 絵本がたくさんあるな。 どれを読もうかな。 パズルもやりたいな。 本がきちんと並んでいないので、題名がよくわからない。 	<ul style="list-style-type: none"> おもしろそうなパズルがあるぞ。 やってみよう。 	○ 絵本やパズルを見たとき、あゆみさんはどんなことを思っただろう。		<ul style="list-style-type: none"> たくさん本があるな。 何を読もうかな。 おもしろい本はあるかな。 なかなか見つからないな。 ばらばらになっていて、いやだな。 よし、パズルをしよう。 		
2 あゆみとしげるは、パズルに夢中になっている。 (公徳心規則尊重 4-(1)) (家族愛 4-(2))	<ul style="list-style-type: none"> 簡単そうだからすぐにできる。 おもしろい。 どんな形になるのかな。 	<ul style="list-style-type: none"> 何ができるか楽しみだ。 	○ パズルをしているときのあゆみさんは、どんな気持ちだったろう。		<ul style="list-style-type: none"> おもしろい。 どんな船の形になるか、楽しみだな。 どんどんできてきたね。 もうすぐ、できそうだ。 		
3 パズルのピースが足りなくて遊びを中断した。二人は、足りないピースを探した。 (公徳心規則尊重 4-(1)) (勤勉努力 1-(2))	<ul style="list-style-type: none"> どこにあるのかな。 見つかるとういいな。 いすの下かもしれない。 	<ul style="list-style-type: none"> おねえちゃん、探して。 どこにあるのかな。 完成できない。 	○ あゆみさんは、パズルのピースを探しながら、どんなことを思っただろう。		<ul style="list-style-type: none"> どこにあるのだろう。 探してみよう。 見つからないな。 もう、いやになっちゃったなあ。 		
4 弟がため息をついた。あゆみも、「あーあ。」と言いたくなった。 (公徳心規則尊重 4-(1)) (家族愛 4-(2))	<ul style="list-style-type: none"> もうやる気がしない。 あんなに夢中でやったのに、弟がかわいそう。 だれが、こんなことをするのだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> つまらないな。 何かおもしろいことがないかな。 あそこまで、形ができたのに。 	◎ 「あーあ。」と言いたくなったあゆみさんは、どんなことを考えただろう。		<ul style="list-style-type: none"> つまらないな。 せっかくここまでやったのに、がっかりしたな。 おもしろくない。 弟がかわいそうだな。 パズルがそろっていないことをだれも知らないのかな。 遊んだ人は、もともどしてほしい。 わたしは、きちんと片付けよう。 		

(2) 指導案
展開

主な活動と発問	予想される児童の反応	・教師の働きかけ ●評価
<p>1 病院や銀行などの公共施設で、順番を待っていた経験を発表する。</p> <p>2 資料「たりないパズル」を聞き、主人公の気持ちを中心に話し合う。</p> <p>○ 絵本やパズルを見たとき、あゆみさんはどんなことを思っただろう。</p> <p>○ パズルをしているときのあゆみさんはどんな気持ちだったろう。</p> <p>○ あゆみさんは、パズルのピースを探しながら、どんなことを思っただろう。</p> <p>● 「あーあ。」と言いたくなったあゆみさんは、どんなことを考えただろう。</p> <p>3 今までの生活を振り返る。</p> <p>4 教師の話を書く。</p>	<p>・ かぜをひいたとき病院に行ったら、すぐくこんでいてずっと待っていた。</p> <p>・ 公民館で映画を見るとき、長い間待っていた。</p> <p>・ たくさん本があるな。</p> <p>・ どれを読もうかな。</p> <p>・ おもしろい本はあるかな。</p> <p>・ なかなか見つからないな。</p> <p>・ ばらばらになっていて、いやだな。</p> <p>・ よし、パズルをしよう。</p> <p>・ おもしろい。</p> <p>・ どんな船の形になるか、楽しみだな。</p> <p>・ どんどんできてきたね。</p> <p>・ もうすぐ、できそうだ。</p> <p>・ どこにあるのだろう。</p> <p>・ よく探してみよう。</p> <p>・ 見つかるといいな。</p> <p>・ もう、いやになっちゃったなあ。</p> <p>・ つまらないな。</p> <p>・ せっかくここまでやったのがっかりしたな。</p> <p>・ おもしろくない。</p> <p>・ 弟がかわいそうだな。</p> <p>・ パズルがそろっていないことをだれも知らないのかな。</p> <p>・ 遊んだ人は、もともどもどしてほしい。</p> <p>・ 本もやぶれていたな。</p> <p>・ わたしは、きちんと片付けよう。</p> <p>・ 校庭に置き去りにされていたボールを片付けた。</p> <p>・ 空き缶専用の箱に、紙くずもいっしょに捨ててしまった。</p>	<p>・ 待っているときの退屈だなあという気持ち呼び起こし、資料への導入とする。</p> <p>・ 漫画本を読んでいたのに飽きなかったという児童の話聞くことにより、待つ間の過ごし方について関心をもたせたい。</p> <p>・ 資料に描かれている問題状況を的確に把握できるように、児童の表情を観察しながら場面絵を提示しゆくりと話しかける。</p> <p>・ 「絵本を読みたい、パズルをしたい」という気持ちに共感することは容易であると思われる。普段あまり発言しない児童を指名し、みんなで話し合うという雰囲気を作る。</p> <p>・ 本の乱雑さに対するいやな感情と絵本やパズルがあつてよかったという気持ちを捕えることができるようにしたい。</p> <p>・ パズルに興味をもつ児童の話聞くことによって、共感的な理解を深めたい。</p> <p>・ パズルをすることが苦手な児童には、トランプやゲーム機などを想定して、夢中になっている気持ちを味わうことができるようにする。</p> <p>・ あゆみ、しげるそれぞれの立場に立って役割演技をすることにより、自分の言葉で二人の気持ちを語るができるようにする。</p> <p>・ 思いや考えを自由に表現できるように、児童の発表やうなずきを大切にす。</p> <p>・ あゆみのつぶやきをワークシートに書きその後小集団で話し合いをすることにより自分の考えを明らかにできるようにする。</p> <p>・ 自分の考えがしっかりしている児童には異なる考えをもつ友達と話し合いができるようにする。考えが不確かな児童には、同じ立場をとっている友達と話し合えるようにする。</p> <p>・ 「どうしてこのように足りなくなったのだろう。」という補助発問によって、価値のねらいに迫りたい。</p> <p>・ 全体の話し合いでは、小集団時の様子やワークシートへの記録をもとに意図的指名をし、多様な考えが表れるようにする。</p> <p>・ この場面で、あゆみがよりよい生き方への自覚を深めていることに気付かせたい。</p> <p>● 資料を通し、主人公の立場に立って自分を語ることができたか。(観察、話し合いワークシート、動作化)</p> <p>・ 日頃、公共物を大切に扱っている事例、約束やきまりを守っている事例を取り上げ身近な体験を思い起こして自己との対話を図りたい。</p> <p>● 公共物の大切さを自覚し、約束やきまりを守っているかどうかについて、自分を見つめることができたか。(観察、発表)</p> <p>・ 教師が子ども時代に似たような体験をしたことを話すことで、余韻を残して終わるようにする。</p>

(3) 授業分析

ア 児童の記述や発言メモをもとにした分析

授業前の児童の3段階への位置付けは、「公德心」、「規則の尊重」に対する意識調査の結果による。

児童一人一人の道徳意識に対する変容については、発言メモやワークシートに記述された内容から判断した。授業後は上の段階に変容した児童が多く、I段階の児童は一人もいない。

児童の意識が多く変わったのは、中心発問の後である。

段階	評価観点	児童数	変容過程			児童数
			資料	中心発問	価値の一般化	
III	ねらいとする価値について気づき、実践しようとする意欲が高まっている。	(6人)				(14人)
		10				
		15				
		18				
		19				
		12				
II	ねらいとする価値に気付いている。	(10人)				(7人)
		9				
		2				
		7				
		3				
		6				
		14				
		20				
		4				
I	感情のみを述べている。	(5人)				(人)
		16				
		5				
		21				
		11				
1						

(児童数の数字1～21は児童の番号を示すが、出席番号ではない。)

図1 道徳意識の変容度(平8.10.18実施 2年1組 21人)

これは、資料

内容と類似した体験を多くの児童がもっており、自分自身の問題と受けとめることができたこと、中心場面を役割演技で再現したことで自己との対話をより豊かすることができたためと考える。

しかし、意識の変容があまり見られなかった児童がいた。これらの児童に対してどのような指導の手立てがあるのか考えていく必要がある。

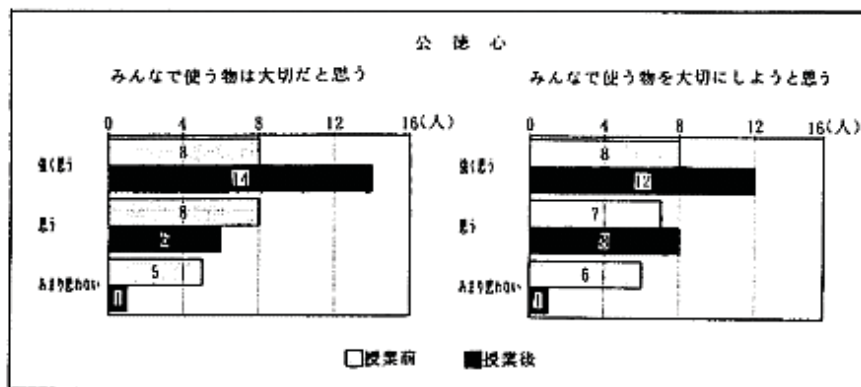
イ 児童の自己評価からみる変容

授業前後の意識調査により、道徳性の変容をとらえた。

授業前の意識からみんなで使う物は大切にしようとする気持ちが読み取れる。

授業後は、その気持ちをより強く持たせることができた。

これは、パスルの問題を自分の問題としてとらえさせることができたためと考える。



規則の尊重では、きまりを守ることは大切だと思うが、実際に実行しようとする意欲まで高まっていない傾向が見られる。

授業後も多少の違いはあるものの同じような傾向が見られる。

これは、今回の資料内容が規則の尊重というよりは、公德心に重点があったためと思われる。

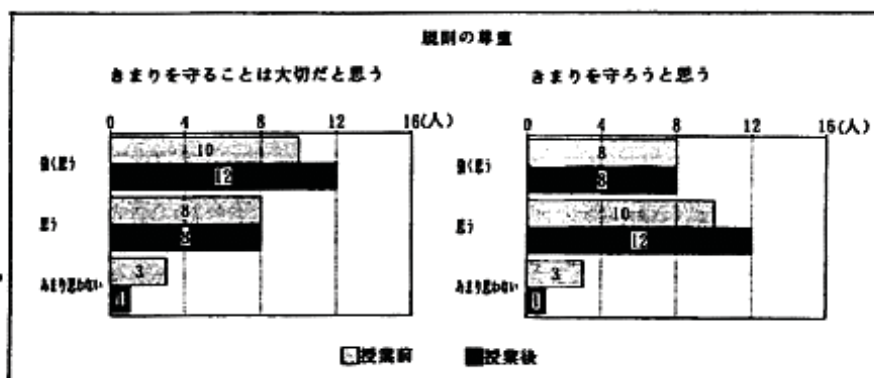


図2 公德心、規則の尊重に関する学級全体の変容
(授業前 平8.10.3 授業後 平8.10.18 2年1組 21人)

ウ 児童による資料評価

授業直後、最も心に強く残った項目を選択した結果が表1である。資料の内容については、「自分の体験に照らして考えた」「内容自体がよかった」という感想が主であった。したがって、「話し合いを続けたい」「この話を聞いてよかった」など、資料を肯定的に把握している児童が多く、印象深いものであったと考えられる。

表1 資料内容に対する児童の感想(平8.10.18 2年1組 21人)

《どんなお話だったので》	《どうだったか》
話がよくわかったので(3人)	もっとたくさん話したかった(7人)
話がよくわからなかったので	もう話し合うのはいやだ。
前に同じようなことがあったので(2人)	心に残る話だった。(5人)
今までになかったことなので	心に残らない話だった。
いいお話なので(10人)	楽しかった。(2人)
あまりよくないお話だったので	つまらなかった。
これからあるかもしれないので(6人)	ためになった。(7人)
こんなことはもうないと思うので	ためにはならなかった。

3 成果と課題

(1) 成果

- 児童の興味関心や発達段階などの実態を考慮した自作資料は、資料内容を児童が自分自身の問題としてとらえられ、主人公に託して自分の思いを語らせることができた。
- 児童の実態を把握した自作資料及び実態に応じて構成した発問や指導法は、児童自身のこれまでの生活を振り返らせるために有効であった。

(2) 課題

- 学習に対して意欲や関心が高まらない児童に対する指導の手立てを研究したい。
- 道徳的価値意識の変容度合やその変容要因が小学校低学年でも的確に把握できる方法を究明していきたい。

【授業研究 3】

小学校第4学年「思いやり・親切」における道徳資料の開発と活用の在り方

守谷町立郷州小学校 教諭 岡田 洋子

1 資料開発にあたって

(1) 題材の選定

本校の児童は明るく活発であり、物事に積極的に取り組むことができる。特に与えられたことや指示されたことに対しては誠実に取り組むことができる。また動植物にやさしく接したり、友達を大事にしようとする気持ちもうかがえるが、時として、相手の立場に立つ思いやりの心に欠ける面も見られる。

道徳性診断テストの結果からは「主として他の人とのかかわりに関すること」の価値の意識が低く、人間関係において基本とすべき「思いやりの精神」のかん養が必要であることが分かった。

そこで、児童の実態に即した身近な「思いやり・親切」に関する題材を選定し、相手の立場に立って考えられる温かい心を育て、自己との対話を豊かにできる資料として開発にあたることにした。

(2) 素材の収集

素材収集に向けて、児童の実態に即した身近なできごとを資料にするという視点から、日常の素材収集を行ったり、児童の実態調査を行ったりした。

日常の素材収集としては、児童の日記や作文また観察、新聞やニュース、教師の体験などの広い範囲から行った。

実態調査では、道徳性診断テストや意識調査を行った。

最後に、親切にしたことや親切にしようと思ったができなかった経験やその時の心情について児童からアンケートを取り参考にした。

(3) 文章化

収集した素材は、多様な価値観が引き出され、深く考えさせるものであること、児童の興味・発達に応じたものであることの2点に視点をおき文章化した。

構成は次のような点に留意した。

- ・3つの場面にした。

登校途中、よし子がかさをささないで歩いている石山さんを見かける場面。

よし子がお母さんから聞いた石山さんの話を思い出している場面。

よし子は石山さんをかさに入れてあげようと近づくが、はずかしさからどうしても声が出ない場面。

- ・資料の内容から多くの価値観が引き出される発問が考えられるもの。
- ・児童が資料の中で自分とかかわらせることが容易になる内容のもの。
- ・ねらいとする価値が心に残り、実践意欲を高めるもの。

2 授業の実践
 (2) 資料の分析表

学年	4 学年	主題名	思いやりの心	2 - (2)	資料名	朝のできごと	出典	自作資料
ねらい	相手のことを思いやり、親切にする心を育てる。		事前指導の工夫	意識調査を行い、本時のねらいとする価値についての意識を把握するとともに、事前の感想文からも実態や一人一人の課題を把握する。				
評価の工夫	事前と事後の感想文を比較し、価値の変容を見る。		事後指導の工夫	自分たちにできるボランティア活動について話し合い意欲を高める。 思いやり・親切というテーマで作文を書く。				
補助資料等	〔導入〕事前アンケートの活用		〔展開〕場面絵・ワークシートの活用		〔終末〕教師の説話			
話のすじ (資料に含まれる価値)	価値に迫る人物の言動と心の動き			基本発問	予想される反応			
	中心人物の言動と心の動き	関連人物の言動と心の動き		◎ 中心発問				
1 朝、よし子は家を出たが、雨が降り出してきたので、かさを取りに家に戻り、学校への道を急いだ。	<ul style="list-style-type: none"> 遅れてしまったら大変だ。 いそがなくちゃ。 			<ul style="list-style-type: none"> かさを取りに戻った後、よし子はどんなことを思ったでしょう。 	<ul style="list-style-type: none"> 遅れてしまったら大変。 遅刻にならないかなあ。 急がなくちゃ。 			
2 途中まで行くと、よし子は石山さんという女の人がかさをささないで歩いているのを見た。	<ul style="list-style-type: none"> あ、石山さんだ。 なんでかさをささないの。 ぬれちゃうじゃないの。 	<ul style="list-style-type: none"> バスからおりた石山さんは、雨が降っているのかさをささないで歩いていた。 	<ul style="list-style-type: none"> かさをささないで歩いている石山さんを見たよし子はどんなことを思ったでしょう。 	<ul style="list-style-type: none"> 石山さん、どうしたんだろう。 かさを持ってこなかったのかな。 				
3 お母さんが、石山さんは身体が不自由でも一生懸命洋服の勉強をして努力している人だと言っていたことをよし子は思い出していた。 (勤勉・努力 1-(3))	<ul style="list-style-type: none"> 石山さんですごい人なんだなあ。 石山さんはえらいなあ。 	<ul style="list-style-type: none"> お母さんから聞いた話 「石山さんは、左手と左足が不自由でも一生懸命努力して、いろいろな洋服が作れるようになったのよ。」 石山さんは、よし子の行動に気がつかないまま歩いていた。 	<ul style="list-style-type: none"> お母さんから聞いた話を思い出したよし子はどんな気持ちになったでしょう。 	<ul style="list-style-type: none"> 石山さんはえらいなあ。 大変だったろうなあ。 				
4 よし子は石山さんに近づき、「どうぞ、入ってください。」と言おうとしたが、どうしても声が出なかった。 (思いやり・親切 2-(2)) (勇気 1-(4))	<ul style="list-style-type: none"> 思い切って「どうぞ…」と言おう。 周りに人がいるからはずかしいな。 ことわられたらどうしよう。 			<ul style="list-style-type: none"> 石山さんの後ろをゆっくり歩きながら、よし子はどんなことを思ったでしょう。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のかさに入れてあげよう。 断られたらどうしよう。 ドキドキしちゃうなあ。 			
5 雨は少しずつ強くなってきたが、よし子は言葉をかけられないまま石山さんの後ろを歩いて行った。 (思いやり・親切 2-(2)) (勇気 1-(4))	<ul style="list-style-type: none"> わたしは勇気がないなあ。 このままだと石山さんはびしょぬれになってしまう。 今度は思い切って言ってみよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 石山さんは、雨にぬれながら歩いていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎言葉をかけられないまま石山さんの後ろを歩いて行ったよし子はどんなことを思っていたでしょう。 	<ul style="list-style-type: none"> わたしは勇気がないなあ。 声をかけるのははずかしい。 思い切って声をかけてみよう。 				
6 その時、よし子の後ろから歩いてきた中学生が石山さんを自分のかさに入れてあげた。 (思いやり・親切 2-(2))	<ul style="list-style-type: none"> あ、わたしが今入れようと思ったのに。 中学生は勇気があるなあ。 よく言えたなあ。 	<ul style="list-style-type: none"> 中学生 ・ぬれちゃうから入れてあげよう。 ・どうぞ、わたしのかさに入ってください。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のかさに入れてあげた中学生を見て、よし子はどんなことを思ったでしょう。 	<ul style="list-style-type: none"> 中学生はすごいなあ。 はずかしくないのかなあ。 わたしが入れようと思ったのに。 				
7 よし子は、石山さんたちを超越し、早足で学校へ向かった。 (思いやり・親切 2-(2)) (勇気 1-(4))	<ul style="list-style-type: none"> 先をおいこされてくやしいなあ。 早く入れてあげればよかった。 今度は入れてあげよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 石山さん ・とてもうれしい。 ・かさに入れてもらって助かるわ。 ・親切にしてくれてありがとう。 	<ul style="list-style-type: none"> よしこはどんな気持ちで、かさに落ちる雨の音を聞いていたのでしょうか 	<ul style="list-style-type: none"> くやしいな。 自分が先に言えばよかった。 今度は中学生のように親切にしよう 				

(2) 指導案
展開

主な活動と発問	予想される児童の反応	教師の支援・評価
<p>1 学校の外で、困っている人に出会った経験について話し合う。</p> <p>○ どのようなことに出会いましたか。</p> <p>○ その時、どのようにしようと思いましたか。</p> <p>2 「朝のできごと」を読んで話し合う。</p> <p>○ 雨の中をかさをささないで歩いている石山さんを見た時、よし子はどんなことを思ったでしょう。</p> <p>◎ 言葉をかけられないまま石山さんの後ろを歩いて行ったよし子は、どんなことを思っていたでしょう。</p> <p>○ よし子はどんな気持ちでかさに落ちる雨の音を聞いていたでしょう。</p> <p>3 今までの生活を振り返って話し合う。</p> <p>○ 他の人から親切にされてうれしかったのは、どんな時ですか。</p> <p>○ 他の人に親切にしてあげたことがありますか。</p> <p>4 教師の説話を聞く。</p>	<p>・電車の中で立っているお年寄りがいた。</p> <p>・席をゆずろうとしたができなかった。</p> <p>・自分のかさに入れてあげよう</p> <p>・石山さん、喜んでくれるかな</p> <p>・ことわられたらどうしよう。</p> <p>・知らんふりしちゃうかな。</p> <p>・わたしは勇気がないなあ。</p> <p>・声をかけるのははずかしい。</p> <p>・もう一度、思い切って声をかけてみよう。</p> <p>・早く入れてあげないと石山さんがぬれてしまう。</p> <p>・中学生はすごいな。</p> <p>・わたしが入れようと思ったのに。</p> <p>・先をこされてくやしいな。</p> <p>・自分が先に言えばよかった。</p> <p>・今度は思い切って声をかけよう。</p> <p>・1年生が算数セットを落として困っている時、一緒に拾ってあげた。</p> <p>・私が転校してきた時、A子さんにいろいろなことを教えてもらった。</p>	<p>・親切にしようとした経験を想起させ、資料のよし子の心情に近づけるようにする。</p> <p>・課題意識を持たせ、ねらいへの自覚化が促されるようにする。</p> <p>・十分時間をとって考えさせたり、話し合いをさせたりしながら、自己との対話を豊かにし、よし子の心情に深く共感させる。</p> <p>・中心発問では、多様な価値観を出し合い、活発な話し合いができるよう、小集団での話し合いを取り入れる。</p> <p>・恥ずかしさが先にたち、行動ができないでいるよし子の気持ちを考えさせることにより親切を行動にうつすには、勇気とか、決断が大切であることを理解させる。</p> <p>評親切にしたいと思いながらもできなかったよし子の気持ちを考えることができたか。 (発表)</p> <p>・親切ができなくて残念だったという気持ちで終わるのではなく、この次は自分も中学生のように迷わず親切にしようという前向きの明るい気持ちが持てるよう助言する。</p> <p>・親切にされてうれしかったこと親切にしてあげて感謝されたこと等の発表を聞かせ、自分の在り方を見つめさせる。 (ワークシート)</p> <p>評自分の在り方を見つめ、今後への意欲が持てたか。</p> <p>・教師の似たような体験談を話して、思いやりの心と実践への意欲を高める。</p>

(3) 授業分析

ア 感想内容の比較とアンケート調査

児童の感想は図1の通り、授業前はI、IIの段階が多いが、授業後は、III、IVの段階に集中し、ねらいとする価値に気付く等意識に変化があったことが分かる。

授業前は、「かさに入れてあげた中学生はえらい。」「どうしてよし子は入れてあげられなかったのだろう。」などと資料に対する共感（または批判）のみを述べている感想や説明的な感想が多い。

授業後は、「言おうとしたけど言えなかったよし子の気持ちがよく分かった。」「結果的には親切にできなかったけど、やさしい気持ちになったよし子はえらい。」とねらいとする価値に気付いている感想が多い。また、価値をつかみ、自己との対話が豊かになった児童も多く、「自分だったらできる。」「自分もできない。」等と、主人公の行動に照らして感想を述べている。さらに、「これからは、困っている人がいたら助けてあげたい。」「知っている人にも知らない人にも親切にしたい。」などと自己の課題や目標をつかんで実践への意欲がうかがえる感想も見られる。

変容の要因については、約77%の児童が図1の変容要因のイ、ウをあげている。

イの問いかけについては、発問を考慮しながら資料作成にあたったため、授業中の児童の反応に応じて多様な問いかけを工夫することができたためと考えられる。

ウについては、児童の実態に即した身近な分かりやすい資料であり、多様な価値観が引き出され、深く考えさせる資料という視点で作成したことが有効であったと考えられる。

イ 児童の自己評価からみる変容

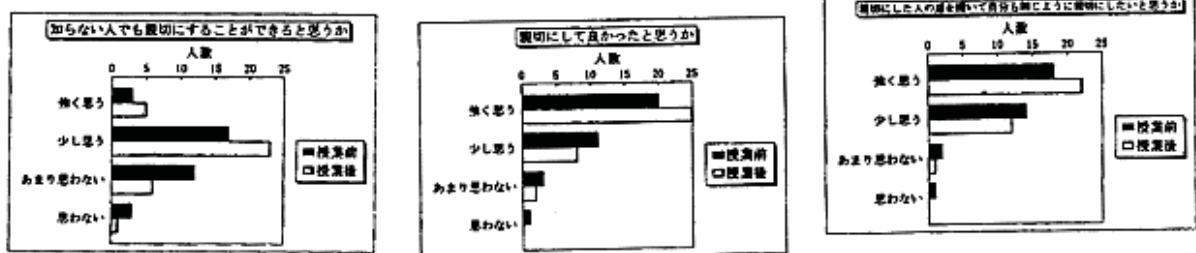
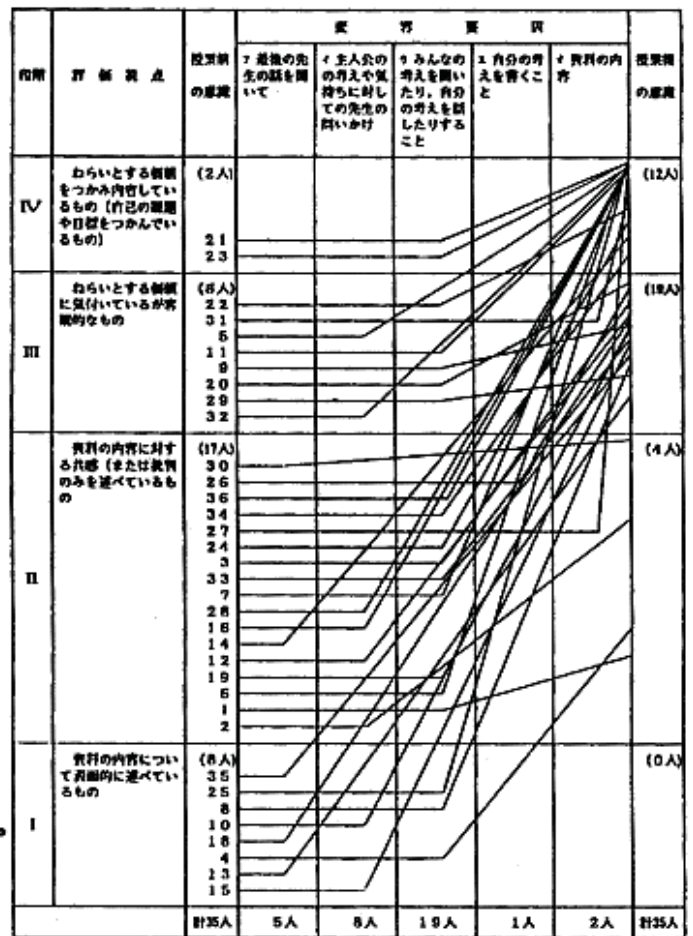


図2 思いやり・親切に関する学級全体の変容

(授業前 平8.11.5 授業後 平8.11.7実施 4年4組 35人)



(授業前の意識の数字1~35は児童の番号を示すが出席番号ではない)

図1 授業前授業後における道徳意識の変容とその要因 (授業前 平8.11.5 授業後 平8.11.7実施)

図2によると、授業前の自己評価では、約89%の児童が「親切にしてよかったと思う」と答えており、意識が高いことが分かる。

また、他の2つの質問事項でも、ほぼ同じ割合の児童が実践への意欲を持っている。

授業後の自己評価では、さらに意識の高さが見られる。特に、「親切にした人の話を聞いて自分も親切にしたいと思うか。」では、強く思うと答えている児童が22人と実践への意欲の一層の高まりが見られる。

しかし、「知らない人でも親切にできるか」との質問事項では、他の質問事項に比べ、「強く思う」と答えた児童の割合が少ない。授業では、誰に対しても親切な心がもてるように児童の心にゆさぶりをかけるようにしたが、多くの児童は知らない人でも親切にできると思うと答えるまでには高まっていない。さらに、児童の心に響くような、人物、場面設定など資料の開発が必要であると考えられる。

ウ 児童による資料評価

表1によると、35人中、19人の児童が「資料の内容がよく分かった」と答え、そのうち10人が「よくわかったので心に残った」、9人が「よ

表1 資料内容に関する児童の感想

(平. 8. 11. 7実施 郷州小学校4年4組 35人)

《どんな内容だったのか》	《どうだったか》
・よく分かったので (19人)	心に残った (19人)
・分かりにくかったので (1人)	心に残らなかった (2人)
・身近なものだったので (6人)	やる気がおきた (13人)
・身近でなかったので (4人)	やる気がおきなかった (1人)
・体験したので (5人)	

くわかったのでやる気がおきた」と答えている。資料の内容が児童の身近なもので分かりやすく、児童の発達に応じたものであれば、児童の関心を高め、多くの意見から多様な価値観が引き出されて自己との対話が起こる。そして、ねらいとする価値が心に残り、実践意欲を促すと考えられる。

3 成果と課題

(1) 成果

- 多くの価値観が引き出される発問を考慮しながら作成した資料は、授業においても児童の反応に応じて多様な問いかけができ、内省を促すことができた。
- 児童の実態に即した分かりやすい資料は、資料の中で自分とかわらせることが容易になり、より深い価値把握とすることができた。
- 児童の発達に即した身近な資料は、ねらいとする価値が心に残り、実践意欲を高めることができた。

(2) 課題

- 児童の実態及び発達段階に即した、自己との対話を豊かにする資料の開発と実践に努めたが、日常生活の中での児童の道徳的実践との関連については、さらに、家庭・地域社会との連携・協力等の具体的な手だてを明確にしておくことが必要である。
- 道徳的価値をより深く自覚させるための授業の展開の在り方とその評価についての実践的研究を進めていきたい。

【授業研究 4】

小学校第4学年「自然愛・動植物愛護」における道徳資料の開発と活用の在り方

岩間町立岩間第三小学校 教諭 平澤 浩子

1 資料開発にあたって

(1) 題材の選定

小学校4年生に自然愛や動物愛といったことを考えさせるのは難しい。しかし、社会の学習などで地域の学習をすることもあり、4年生ともなると、着実に自分を取り巻く地域といったようなものに目が向いてくるようになる。

こうした時期だけに自分の身の回りの自然、あるいは動物に注目させ、自然愛や動物愛といったことを少しずつ考えさせていくべきではないだろうか。

今回の題材の選定にあたっては、この視点から、まず児童の生まれ育った地域にある素材に着目し資料化した。身近で興味関心のあることで「自然愛・動物愛」について考えさせようしたのである。

(2) 素材の収集

自然や動植物を愛する心を育てるために、郷土である岩間町から素材を収集することにした。岩間町では、毎年ホタルの観察会が行われている。だが、そのホタルが少なくなり、町はホタルの里づくりをしようとしている。

まず、岩間町教育委員会発行の「いわまの自然」と図書館にある「ホタルのくらし」を参考文献とし、ホタルの生態について調べた。また、環境庁自然公園指導員である廣瀬誠氏からホタルの生態と環境問題についての指導を受けた。

さらに、岩間町で取り組もうとしている「ホタルの里づくり」の具体的な内容についても話を聞き、ホタルの観察会に実際に参加した。この時の様子をビデオカメラにとった。

(3) 文章化

ア 素材を資料として構成する。

人物を配置し、資料を通して話し合える場面を適切に構成する。

ここでは、次の3つの場面から構成することにした。

(ア) ホタルを見たことがない主人公がホタルの観察会に参加する場面。

(イ) 廣瀬氏の話の聞いたり、お父さんと話をしたりする場面。

(ウ) 捕まえたホタルをそっと逃がし、飛んで行くホタルを見送る場面。

イ 文章表現を工夫し、文章化する。

内容、分量や表記法が、ねらい達成や児童の発達段階など資料の具備すべき要件にあっているか検討する。その際、情景がとらえやすいように表現を工夫したり、主人公の行為を分かりやすく記述したりして、資料内容の理解を助けるようにする。

ウ 題名をつけ、仕上げをする。

題名つけでは、明らかにねらいがわかるようなものは、児童の多様な考え方や感じ方を引き出す妨げになると考えられるので避けたい。

さらに、出来上がった資料は、何度も授業で使用し、校内での研修会で検討を重ねたりすることが重要である。

2 授業の実践

(1) 資料の分析表

学年	4学年	主題名	生き物を大切にすること	3-(1)	資料名	ホタルの里	出典	自作資料
ねらい			優しい心で動植物に接し、愛護しようとする心をもつ。	事前指導の工夫				
評価の工夫			中心発問で書く活動を取り入れる。広せ氏への手紙により実践意欲をみる。	事後指導の工夫				
補助資料等			【導入】 ホタルの幼虫 カワニナ		【展開】 虫取り網、虫かご、カエルの鳴き声 ホタルの写真(TP)、ホタルのVTR ホタルの一生の図			【終末】 日記 成長記録ノート
話のすじ			価値に迫る人物の言動と心の動き				○ 基本発問 ◎ 中心発問	予想される反応
(資料に含まれる価値)			中心人物の言動と心の動き	関連人物の言動と心の動き				
1 岩間町にホタル観察会があることを知る。			見たことがない。 連れて行ってもらうことにした。 ・ホタルってどのように光るのかな。 ・楽しみだな。					
2 観察会の日、わくわくしながら虫取り網と虫かごをもって出掛ける。 (友情 2-(3)) (家族愛 4-(3))			うきうきしながら、虫取り網と虫かごを持って出かけた。 ・ホタルを捕まえたら、家で飼おう。 ・早く、捕まえたいなあ。 ・みんなに見せてあげたい。				○ 虫取り網と虫かごをもって出掛けたときわたしはどんなことを考えていたか。	・たくさん取って来よう。 ・お母さんや友達にも見せてあげよう。 ・家で飼おう。 ・早く捕まえたいなあ。
3 広せさんから、ホタルについての説明やホタルの見られる場所が減って来たことなどを聞く。 (自然愛動植物愛護 3-(1)) (敬けん 3-(3)) (生命尊重 3-(2))			初めて分かったことがたくさんあった。 ・ホタルはカワニナという貝を食べるんだ。 ・ホタルの幼虫やカワニナはきれいな水でないと育つことができないんだ。 ・川岸がコンクリートになるとさなぎになれないんだ。 ・成虫はえさを食べないのですぐに死んでしまっかわいそうだな。 ・大切にしないとホタルがいなくなってしまう。 ・カエルもいなくなるなんて信じられないけど。	(広せさん) スライドを使って分かりやすく説明した。 「20年前と比べるとホタルを見られる場所が減った。水が汚れて来ていることも大きな原因。カエルの声も聞こえなくなるかもしれない。」 とさびしそうに言う。 ・ホタルについて分かってほしい。 ・ホタルが昔のように多くなるといい。 ・自然を守ってほしい。			○ 広せさんの話を聞きながら、わたしはどんなことを考えていたか。	・ホタルやカワニナはきれいな水でないと育つことができないんだ。 ・ホタルは短い命なんだ。 ・ホタルはえさを食べないんだ。 ・自然を大切にしないとホタルはいなくなってしまうんだ。 ・カエルがいなくなるなんて信じられない。 ・自然を大切にしよう。
4 ホタルの小さな光が見えた。 (敬けん 3-(3))			・きれいだなあ。 ・長く生きられないんだなあ。 ・仲間を探しているんだな。					
5 ホタルを手にとって見たけれどもそっと草むらに戻し、とんで行くホタルをいつまでも見ていた。 (生命尊重 3-(2)) (思慮反省 1-(2)) (自然愛動植物愛護 3-(3)) (郷土愛 4-(5))			足元で光っているホタルを見つけ、手にとって見たが、そっと草むらにもどす。 飛んで行くホタルをいつまでも見ている。 ・捕まえようとしてごめんね ・自然を大切にしなくちゃ。 ・元気だね。 ・水をきれいにするよ。 ・きれいだったなあ。				◎ ホタルをいつまでも見送りながら、わたしはどんなことを考えていたか。	・短い命を精一杯生きてほしい。 ・水を汚さないようにするよ。 ・きれいだったなあ。 ・捕まえようとしてごめんね。 ・来年もたくさん見られるといいな。 ・自然を大切にしよう。

(2) 指導案
展開

主な活動と発問	予想される児童の反応	支援・個を生かす工夫
<p>1 ホタルの幼虫を見ながら、ホタルについて知っていることを話合う。</p> <p>2 資料「ホタルの里」を聞いて話合う。 ○虫取り網と虫かごをもって出掛けたとき、わたしはどんなことを考えていたか。</p> <p>○ 広せさんの話を聞きながら、わたしは、どんなことを考えていたか。</p> <p>◎ ホタルをいつまでも見送りながら、わたしはどんなことを考えていたか。</p> <p>3 広せさんに手紙を書く。</p> <p>4 教師の話聞く。</p>	<p>・幼虫はきれいではないね。 ・今年見たけど、お尻が光ってきれいだった。 ・ゲンジボタルとヘイケボタルがいるんだよ ・幼虫は水の中にいるよ。 ・7月頃飛ぶよ。</p> <p>・たくさん取ってこよう。 ・お母さんや友達にも見せてあげよう。 ・ホタルを捕まえたら、家で飼おう。 ・早く、捕まえたいな。</p> <p>・今飛んでいるのはゲンジボタルというんだ。 ・ホタルはカワニナを食べる。 ・ホタルの幼虫やカワニナは、きれいな水でないと育つことができないんだ。 ・川岸がコンクリートになるとサナギになれないんだ。 ・成虫は、えさを食べないで、すぐ死んでしまっかわいそうだな。 ・大切にしないとホタルがいなくなってしまう。 ・カエルもいなくなるなんて信じられないな。 ・生き物を大切にしよう。 ・短い命なので一生懸命生きてほしい。 ・頑張ってるね。 ・来年もたくさんのホタルが見られますように。 ・自然を大切にしなくちゃ。 ・水を汚さないようにするよ。</p> <p>・ぼくも生き物を大切にしたいな。 ・ホタルがいなくならないように。 ・生き物について、もっと知りたいな。</p>	<p>・本物のホタルの幼虫を用意して、ホタルの幼虫を見ながら話させる。</p> <p>・臨場感を出すために、室内を暗くしてホタルのVTRを放映する。 ・虫取り網と虫かごを持たせ役割演技をさせる。</p> <p>・ホタルの写真をスクリーンに写して、ホタルの飛んでいる雰囲気づくりをする。 ・生き物にあまり関心を示さないことが予想される、A男、B子を意図的に指名し、思いを語らせる。 ・生き物に対する様々な気づきについても取り上げる。</p> <p>・ワークシートによる「書く活動」を取り入れ、一人一人が自分の考えを持ち、話合いに参加できるようにする。 ・グループの話合いを取り入れだれもが自分の考えを言えるようにする。 (評) 「わたし」の気持ちが考えられたか。(書く活動、話合い) ・考えがうまく書けないC男、D子に寄り添い、考えを書けるよう援助する。 (評) 生き物に対する自分の考えを書くことができたか(手紙)</p>

(3) 授業分析

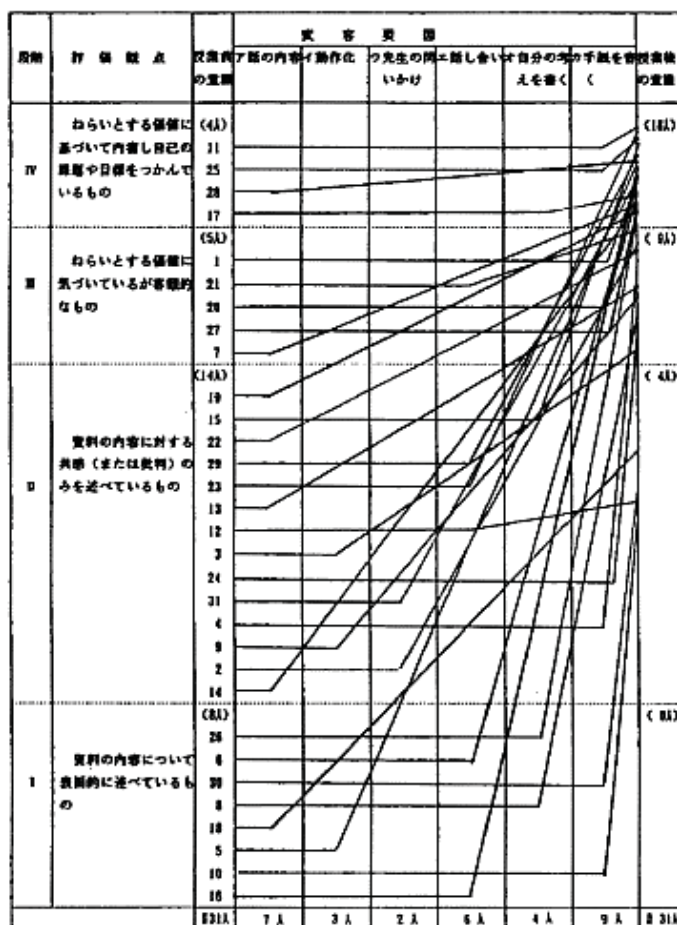
ア 感想内容の比較とアンケート調査

授業前の感想では、「ホテルは短い命なんだ。」「どうしてホテルは光るのだろう。」といったホテルの一生についての内容が多かった。児童にとって、初めて分かったことの驚きが大きかったからではないかと考える。

授業後の感想を見てみると、31人中25人の児童が上位の段階に変容している。段階での変容が見られなかった児童も、同じ段階の中ではあるが、深く考えていることが感想から読み取れる。

変容の要因としては、資料中の人物に「手紙を書く」や「話の内容」が多い。また、「話し合い」で変容している児童もいる。

児童の実態に合った興味や関心のある資料をどのように使い、自己を見つめさせていくのかを十分考えなくてはならない。



(「授業前の意識」の数字1~31は児童の番号を示すが、出席番号ではない。)

図1 授業前授業後における道徳意識の変容とその要因

(授業前 平8.10.2 授業後 平8.10.4 実施 4年2組 31人)

イ 児童の自己評価からみる変容

自然や動植物を愛する心を4つの視点のもとに、児童の自己評価から変容をみてみた。図2に示したように、授業前と授業後では、どの項目も自然愛・動植物愛護に関する意識が高まってきたことが分かる。

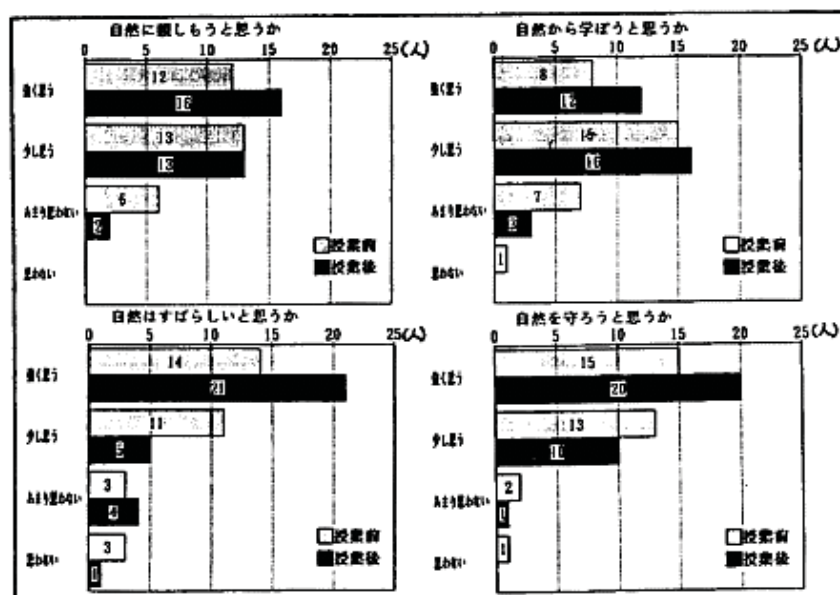


図2 自然愛・動植物愛護に関する学級全体の変容

(授業前 平8.9.9 授業後 平8.10.29 実施 4年2組 31人)

「自然に親しむ」、「自然から学ぶ」といったことを考えさせることによって、自然のすばらしさに気づく児童が増え、やがて自然環境を守ろうとする意識や自然や動植物を愛する心が育っていくものと考えられる。

このようなことから「ホタルの里」のような資料を使った授業がますます重要になってくるだろう。

ウ 児童による資料評価

31人中14人の児童が、「話の内容がよく分かった」とし、その結果、13人の児童が「心に残った」と答えている。話の内容がよく理解できるということは、資料を通しての話合いではたいへん重要である。資料の中の人物の気持ちを十分考えることもできるし、自分を深く見つめることもできるからである。

また、この資料のホタルのように、児童の住んでいる町に生息するものに親しみを持ち興味や関心を示すことがある。今回の場合でも実際にホタルを見たことがない児童においても関心は非常に高かった。

心に残る資料と

するためには、児童にとって、内容のよく分かる資料であることが大切である。

さらに、身近なことであると、より心に残ることが分かった。

表1 資料内容に対する児童の感想
(平8.10.4 難 4年2組 31人)

〈どんな内容だったの？〉	〈どうだったか〉
・よくわかったので(14人)	・心に残った(28人)
・わかりにくかったので	・心に残らなかった
・身近なことだったので(9人)	・やる気がおきた(3人)
・身近でなかったので	・やる気がおきなかった
・見たことのある(4人)	
・見たことのない(4人)	

5 成果と課題

(1) 成果

- 郷土に関する自作資料は、児童にとって身近な問題として考えられ、自己を見つめることができ、自己との対話を容易にした。
- 児童にとって分かりやすい資料は、人物の気持ちになって考えることができ、自己を見つめる上で大変有効であった。

(2) 課題

- 地域の中から多くの素材を集め、児童の実態をとらえ新しい視点に立った多様な資料を作成していきたい。

【授業研究 5】

小学校第5学年「信頼・友情，助け合い」における道徳資料の開発と活用の在り方

麻生町立麻生小学校 教諭 川尻 政利

1 資料開発にあたって

(1) 題材の選定

小学校高学年の児童は、同性のグループを形成し、リーダーを中心に協力し合いながら集団で活動することを好む傾向がある。本学級の児童も気の合う仲間同士では、互いに言葉をかけ合い助け合う姿が見られる。しかし、自己の利害や損得にかかわる場面になると、自分の考えを押しつけようとしたり、相手が傷つくような言葉を口にしたりすることがある。時には、仲良しのグループや男女間でさえも反発し合い、感情的になることもある。

そこで、児童が意欲をもって取り組み、互いに協力し合う姿が見られる「なわとび大会」を資料化したいと考えた。特に、学級の全員が参加し、互いに力を合わせなければならない「チームジャンプ」を取り上げることにした。そして、児童が興味・関心をもち、資料内容を自分の問題としてとらえることによって、互いに理解し合い、励まし合い、協力し合いながら友情を深めることの大切さに気付かせたいと考えた。

(2) 素材の収集

「なわとび大会」における児童の取り組みについて、体験過程における児童の心情の変容が実際場面でとらえられるよう素材の収集に努めた。特に、学級全員による練習の様子や男女間での技能の差などに留意して、調査や観察を行った。

- 前年度行われた「なわとび大会」についての感想カードを読み、ねらいとする価値についての児童の思いを調べる。
- 児童との何気ない語らいの中から、「なわとび大会」に対する思いや実際にあった出来事、そのときの気持ちなどを聞く。
- 高学年担任の先生方から、チームジャンプについてのエピソードなどを聞く。
- 作成者自身の体験を振り返るとともに、実際の練習の様子を観察する。

(3) 文章化

文章を書くにあたっては、素材の収集によって得られた各資料を十分生かすとともに、児童の実態を踏まえた資料内容の展開に努めた。そして、児童が実際に起こりうる問題として資料内容をとらえ、主人公の心情と自分の心情との葛藤を通して、自己との対話を豊かにできるよう推敲を重ねた。

- 起承転結を踏まえた場面構成を行い、帰りの会でなわとびの練習について話し合う様子を中心場面とした。
- なわとびの苦手な人物を男子に、協力しようとする人物を女子に設定するとともに、児童の実態に合った言葉を会話文に取り入れ、資料内容を共感的にとらえられるようにした。
- 特定の友達を想像することのないように、人名を工夫したり、直接的な表現を避けたりした。また、非難する場面などでは、過度に強調しないようにも留意した。
- 場面の状況をとらえやすくするために、手書きによるさし絵を二つ活用した。

授業の実践
(1) 資料の分析表

学年	5 学年	主題名	協力し助け合う心 2-(3)	資料名	なわとび大会	出典	自作資料
ねらい	互いに信頼し合って友情を深め、協力し助け合う心情を育てる。		事前指導の工夫	各教科におけるグループ学習や係活動・当番活動等の様子から本時のねらいとする価値についての考え方を把握する。資料を事前に配布し、読後の感想把握や課題づくりを行う。			
評価の工夫	ワークシートを活用し、子ども一人一人の心情の深まりをみる。また、話し合いにおいては、座席表を活用する。		事後指導の工夫	学級活動や学校行事等において、学級全員が協力し助け合って活動できるように助言や励ましを行う。「友達への手紙」を書くなどの活動を行い、意識の継続化を図る。			
補助資料等	〔導入〕 録音テープ、長なわ		〔展開〕	場面絵、短冊、ワークシート		〔終末〕	児童作文
話のすじ (資料に含まれる価値)	価値に迫る人物の言動と心の動き		基本発問 ○ 中心発問		予想される反応		
	中心人物の言動と心の動き	関連人物の言動と心の動き					
1 毎年恒例の校内なわとび大会が近づいてきたが、なわとびが大の苦手な直也は気が重くなる。	(直也) ・うまくとべないとみんなから冷やかされるのでやりたくない。 ・チームジャンプでは、みんなに迷惑をかけてしまう。	(洋美・学級の友達) ・直也君がいては優勝は無理だ。 ・学級の人々にとっては、迷惑だ。	・直也君はどんな気持ちで練習を始めたのでしょうか。		・何とかして上手にとべるようになりたい。 ・みんなに迷惑をかけないようにしたい。 ・みんなから冷やかされたくない。		
2 公園で仲良しの健太に教えてもらいながらチームジャンプの練習をするが、うまくとべない。直也の練習する姿を同じ学級の知子が偶然見かける。(希望・勇気、不撓不屈 1-(2))	(直也) ・練習をして、何回もとべるようになりたい。 ・やっぱり長なわはうまくとべない。 (知子) ・直也君なりに一生懸命努力している。	(洋美・学級の友達) ・直也君はどのように頑張っているのだろうか。	・直也君はどんな気持ちで練習を始めたのでしょうか。		・何とかして上手にとべるようになりたい。 ・みんなに迷惑をかけないようにしたい。 ・みんなから冷やかされたくない。		
3 体育の時間にチームジャンプの練習が始まる。何回練習しても直也がとべないために2～3回で止まってしまう。そのため、洋美から非難を受ける。(信頼・友情、助け合い 2-(3))	(直也) ・どうせ失敗するからやりたくない。 ・やっぱりだめだ。 ・学級の人々に悪い。逃げ出したい。	(洋美・学級の友達) ・直也君はどのように頑張っているのだろうか。 ・やっぱり優勝なんかできない。	・何回も失敗する直也君を見て学級のみんなはどう思ったのでしょうか。		・どうしてこんなに下手なんだろう。 ・直也君一人のために迷惑するなあ。 ・学級の優勝はとうてい無理だ。 ・かわいそうだなあ。		
4 帰りの会で、チームジャンプの練習が提案される。賛成意見の少ない中で、知子が学級の人々に働きかけ練習をすることになる。直也は最後までがんばろうと決心する。(信頼・友情、助け合い 2-(3)) (思いやり・親切 2-(2)) (希望・勇気、不撓不屈 1-(2))	(知子) ・困っている直也君に協力したい。 ・うまくとべるように努力した直也君のことをみんなに知ってもらいたい。 (直也) ・自分のために休み時間がなくなってしまう。 ・みんなに教えてもらって最後までがんばろう	(洋美・学級の友達) ・せっかくの休み時間をなくしたくない。 ・練習をしようと言っても全員集まれない。 ・人のことを非難するばかりで自分勝手すぎたのではないかと。 ・みんなで力を合わせて練習しよう。 ・大会まで練習すれば、みんなが上手になる。	○ 知子さんはどんな気持ちで発言したのでしょうか。		・同じ生活班だから何とかしてあげたい。 ・男子だけど、直也君がかわいそうだから助けてあげたい。 ・学級の人々が自分勝手すぎるから何とかしたい。 ・直也君なりに努力しているのだから協力してあげたい。		
5 練習方法を工夫したり、協力し合ったりしながら、大会前日まで練習を続ける。直也は少しずつとぶタイミングを覚えていく。(信頼・友情、助け合い 2-(3)) (希望・勇気、不撓不屈 1-(2))	(直也) ・長なわをとぶタイミングをしっかりと身に付けたい。 ・親身になって教えてくれる友達がいてうれしい。 ・なわとび大会には、1回でも多くとびたい。	(学級の友達) ・何とかしてうまくとべるようにしてあげたい。 ・みんなで力を合わせて練習するのは楽しい。 ・なわとび大会では全員の力を出し合ってがんばりたい。	・学級全員で練習をするようになったとき、直也君やみんなはどんなことを考えたのでしょうか。		・みんなが自分のために一生懸命教えてくれてうれしい。 ・みんなで練習できてよかった。 ・なわとび大会には、みんなの力を合せてがんばりたい。		
6 なわとび大会当日、学級全員が心一つにして、元気なかけ声とともにチームジャンプに取り組む。(信頼・友情、助け合い 2-(3))	(直也) ・うまくとべるようになった。みんなありがとう。 ・みんなといっしょにとぶことができうれい。	(学級の友達) ・優勝できるようみんなががんばろう。 ・学級全員でとぶのはとても楽しい。 ・これからもみんなと助け合いたい。	・心一つにしてとぶ直也君やみんなはどんな気持ちだったのでしょうか。		・うまくとべるようになった。みんなありがとう。 ・みんなといっしょにとぶことができうれい。 ・学級全員でとぶのはとても楽しい。 ・これからもみんなと助け合いたい。		

(2) 指導案
展開

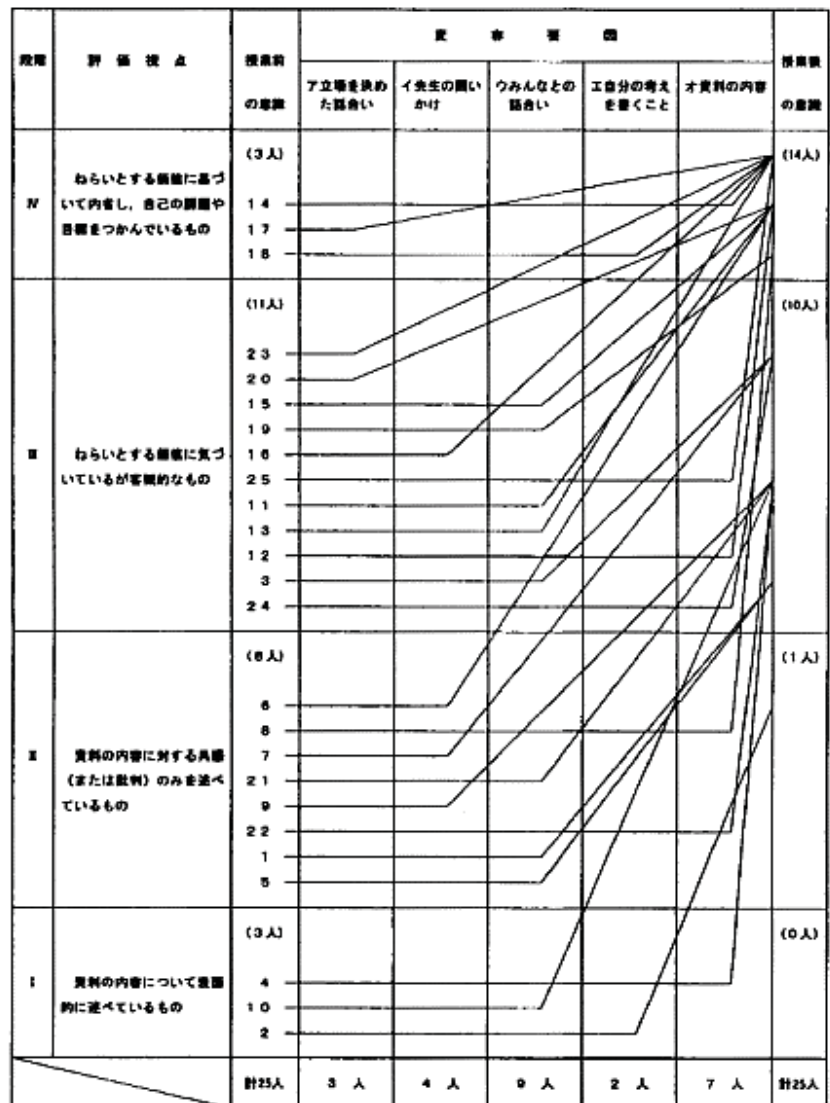
主な活動と問いかけ	児童の思いや心のふくらみ	教師の支援・評価(※)
<p>1 資料「なわとび大会」を読んで話し合う。</p> <p>○ 直也君はどんな気持ちで練習を始めたのでしょうか。</p> <p>◎ 知子さんはどんな気持ちで発言したのでしょうか。</p> <p>○ 心を一つにしてとぶ直也君やみんなはどんな気持ちだったのでしょうか。</p> <p>2 自分の生活を振り返り、話し合う。</p> <p>○ 友達と力を合わせてがんばったことや楽しかったことがありませんか。そのとき、どんな気持ちでしたか。</p> <p>3 教師の説話を聞く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなから冷やかされたくない。 ・何とかして上手にとべるようになりたい。 ・みんなに迷惑をかけないようにしたい。 ・同じ班だから何とかしてあげたい。 ・男子だけど、直也君がかわいそうだから助けてあげたい。 ・学級のみんなが自分勝手すぎるから何とかしたい。 ・直也君なりに努力しているのだから協力してあげたい。 ・うまくとべるようになった。みんなありがとう。 ・みんなといっしょにとぶことができてうれしい。 ・学級全員でとぶのは、とても楽しい。 ・これからもみんなで助け合いたい。 ・学級園の草抜きを友達とがんばった。 ・友達と協力して新聞を発行した。わからない友達に教えてあげて楽しかった。 ・ピカピカ大作戦で男女協力して掃除をした。「力があるね。」と女子に言われてうれしかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実物の長なわを提示したり役割読みのテープを流したりすることによって、臨場感を高めるようにする。 ・事前に行った課題づくりから、話合いの柱を決める。 ・なわとびが苦手であることや洋美たちの言葉をおさえ直也なりに努力しようとする心情をつかむことができるようにする。 ・体育の時間における学級みんなの思いもおさえる。 ・知子、直也、洋美たちの三者の立場での話合いを通して、思い切って発言する知子の心情により深く共感できるようにする。 ・事前調査の結果等から、三者の立場について意図的に児童を指名する。 ・補助発問を用意し、知子の発言によって変わっていく学級の様子についてもおさえる。 ※自分の考えと友達の考えを比べながら、知子の心情を考えるなど、自己との対話が豊かにできたか。 (話合い、発表) ・なわとび大会を迎えるまでの学級全員による練習の様子をおさえ、直也やみんなの気持ちをとらえることによって、協力し助け合うことのすばらしさに気付かせたい。 ・ワークシートに書くことによって、友達との励まし合い・助け合いについて振り返り、自己を見つめる手立てとする。 ※一人一人が自分の生活を振り返り、友情の大切さをとらえることができたか。 (ワークシート、発表) ・友達の作文を紹介し、今後の実践意欲を高める。

(3) 授業分析

ア 感想内容の比較とアンケート調査

図1の通り、授業前の調査では、Ⅱ及びⅢの段階の道徳意識をもつ児童が多い。Ⅱの段階に位置する児童の感想では、直也の努力について述べたものが多く、Ⅲの段階に位置する児童の感想では、知子のやさしさや洋美に対する批判などが見られる。また、段階による男女の差が見られ、ⅠやⅡの段階では男子が多く、ⅢやⅣの段階では女子が多くなっている。

授業後の調査では、20人の児童がより高い段階の道徳意識へと変容している。児童の感想には、友達との助け合いについて考えたものや体験に基づく自分なりの課題を意欲的に取り上げたものなどが見られる。また、困っている人なら誰であってもみんなで助け合いたいなどの学級全体や男女間の協力の大切さについて述べた感想も見られる。



(「授業前の段階」の数字1～25は児童の番号を示すが、出席番号ではない。)

図1 授業前授業後における道徳意識の変容とその要因
(授業前 平8.10.8 授業後 平8.10.11実施 5年1組 25人)

変容の要因については、図1の通り、「みんなとの話し合い」や「資料の内容」を挙げている児童が多く見られる。その理由として、児童が資料内容を自分の問題としてとらえ、学級全体の話し合いを通して、より深く自己を見つめられたことが考えられる。

授業において高まった道徳意識を継続させる指導や実践への意欲を生かす事後の指導について、十分工夫していかなければならないと考える。

イ 児童の自己評価からみる変容

「信頼・友情、助け合い」に関して、三つの視点から、児童の自己評価によって、意識の変容をとらえることにした。

図2の通り、「友達とは、どんなときでも信じ合い、助け合うものだと思いますか。」の質問では、授業後に19人の児童が「強く思う」と答え、意識の高まりが見られる。

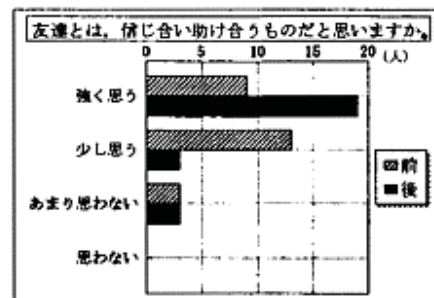


図2 信頼・友情、助け合いに関する学級全体の変容
(授業前 平8.10.8 授業後 平8.10.11実施 5年1組 25人)

図3の通り、「だれにでも、よいところがあると思いますか。」の質問でも、「強く思う」と答えた児童が多く、図2と同様の傾向が見られる。

しかし、図4の通り、「男女の区別なく、協力し、助け合いたいと思いますか。」の質問では、授業後であっても、「強く思う」と答えた児童は5人だけであり、また全体的に見ても意識の高まりはあまり見られない。

授業においては、男女の区別なく誰に対しても協力し、助け合うことが大切だという考え方ができるような働きかけが不十分であったと考える。自作資料の活用にあたって、「男女の協力」についての発問等を工夫するとともに、資料内容についても改善を図っていく必要があると考える。

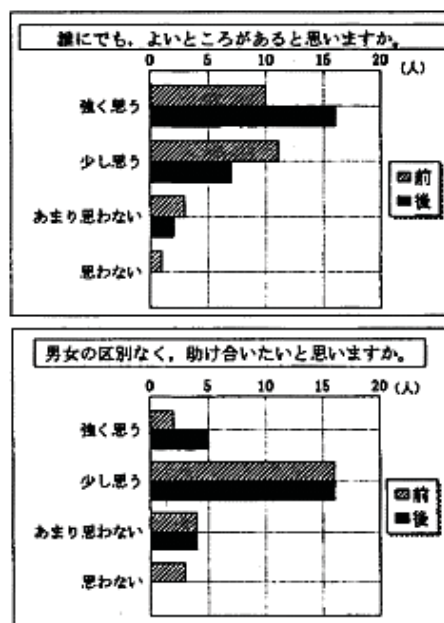


図3・4 信頼・友情、助け合いに関する学級全体の姿勢
(授業前 平8.10.8、授業後 平8.10.11実施 5年1組 25人)

ウ 児童による資料評価

表1の通り、学級の半数以上の児童は、資料内容と類似の体験があるので、やる気がおきた(8人)、心に残った(7人)と答えている。また、その他の児童についても、資料内容がよくわかったので、やる気がおきた(3人)、心に残った(7人)と答えている。

表1 資料内容に対する児童の感想
(平8.10.11実施 5年1組 25人)

(どんな内容だったので)	(どうだったか)
・よくわかったので(10人)	・やる気がおきた(11人)
・わかりにくかったので	・やる気がおきなかった
・よくあることなので	・心に残った(14人)
・あまりないことなので	・心に残らなかった
・体験しているので(15人)	
・体験していないので	

児童は、資料中の人物に自己の体験や思いを重ね合わせて価値をとらえることができたので、実践への意欲を高めたり、資料内容を心に深く刻むことができたと考えられる。

3 成果と課題

(1) 成果

- 児童の実態を生かした自作資料は、児童が資料中の人物に自己の体験や思いを重ね合わせやすく、自己との対話を深めることに有効であった。
- 身近な素材を取り上げた自作資料は、児童の興味・関心を高め、主体的な学習活動を促すことができた。
- 自作資料を活用した授業は、児童の多様な価値観を引き出し、より高められた道徳的価値に照らして、深く自己を見つめさせることができた。

(2) 課題

- 多様な価値観が引き出され、ねらいとする道徳的価値がさらに焦点化できる資料づくりを進めるため、児童の意識の変容をより客観的にとらえられる評価の方法を研究したい。
- 自作資料を生かした指導の展開や方法等について、自己内対話を豊かにできるようにさらに検討するとともに、道徳教育での指導とのかかわりにおいて、各教科、特別活動等との関連付けを明確にしておく必要がある。

【授業研究 6】

小学校第5学年「家族愛」における道徳資料の開発と活用の在り方

金砂郷町立郡戸小学校 教諭 村木 聖一

1 資料開発にあたって

(1) 題材の選定

高学年においては、児童は積極的に家庭生活にかかわることが求められている。しかし、本校児童の普段の様子や話題の中からは、積極的に家族の一員としてかかわりをもとうとする意識があまり見られないのが現状である。そこで、「家族愛」をテーマとした身近な問題を題材とし、家庭での自分の役割を自覚し、家族のために積極的に役立とうとする道徳的実践力を育て、自己との対話を豊かにできる資料の開発をすることにした。

(2) 素材の収集

素材の収集に当たっては、一人一人が自分自身の問題として親のありがたさを再認識し、家族のために積極的に役立とうとする心情を育てることができるような収集を心がけた。そのため、児童の生活の中から、次のような問題点に着目して収集した。

- ・たよりや連絡等がその日のうちに、家庭に届かないことがある。
- ・忘れ物をしたときに、学校から電話で家庭に連絡して届けてもらう児童がいる。
- ・高学年になるにつれ、家庭での会話が少なく、親に対する言葉遣いにも問題がみられる

(3) 文章化

文章化にあたっては、長文で難解なものは避け、児童自身が自分の問題としてとらえ易く自己との対話を豊かにできるよう内容を工夫する。資料の構成は、主人公の不注意によって親に迷惑をかけ叱られるが、それを契機に両親の深い愛情に気づき、家族の一員としての役割を自覚するというものにし、以下のように推蔽を重ねた。

・主人公（女子）が調理実習で使う材料を、前の晩まで親に頼むことを忘れていた。親に叱られるが何とか都合をつけて用意してくれる。

- ・現在は、容易にコンビニエンス・ストア等で入手できる。感動が薄い。
- ・家族構成を考え、活動を伴うものがよいのではないか。

・主人公（男子）が始業式前日、雑巾が無いことに気づき、家中探すが見つからない。弟と一緒に作り始めたが、弟が針で指を刺してしまう。両親に叱られるが翌日、雑巾と父の手紙を目にする。

- ・弟のけがをもっと大げさにしてはどうか。
- ・父の手紙の内容を優しく語りかけるようにしてはどうか。
- ・細部にわたる表現の検討をする。

資料完成（場面絵を入れる）

2 授業の実践

(1) 資料の分析表

学年	5学年	主題名	細の気持ちを考えて	4-(5)	資料名	雑巾	出典	自作資料
わらい			父母の愛情を知り、感謝するとともに、明るくあたたかい家庭を築こうとする心情を育てる。	事前指導の工夫		家族について日頃思っていることをアンケート等で調べ、家族に対する関心を高めておく。		
評価の工夫			ワークシートを使用し、一人一人の考えを把握する。	事後指導の工夫		家族への手紙を書くことにより、一層自分の気持ちを確かなものにする。(自己との対話を豊かにさせるため。)		
補助資料等			[導入] 心配させたと感じたことのアナケート調査	[展開] ワークシートの活用、場面絵、雑巾		[終末] 家族からの手紙		
話のすじ			価値に迫る人物の言動と心の動き			基本発問		予想される反応
(資料に含まれる価値)			中心人物の言動と心の動き	関連人物の言動と心の動き		◎ 中心発問		
1 冬休みの最後の日に持ち物を用意していたら、兄弟して雑巾を作ってもらうことを忘れていたことに気付く。			「明、雑巾作ってもらおうに話したか。」 話してるといういな。	明 「ううん。にいちゃんは、話すのを忘れた。」		- 雑巾を作ってもらうことを頼み忘れたことに気付いたときどんなことを思ったでしょう。	- もっと早く用意しておけばよかった。 - 弟も忘れていたんだから、ぼくだけのせいではない。 - 雑巾を作るのは、お母さんなんだから作ってなかったら、お母さんが悪い。	
2 兄弟して家中を探すが、見つからない。 (思慮反省1-①)			昨日口答えしたから、頼みにくいな。 自分で作ろう	明 「ぼくにもやらせて。」 楽しいな。		- 弟がけがをしてしまったとき広はどんなことを思ったでしょう。	- ちゃんと頼んでおけばよかった。 - 弟には、やらせなければよかった。 - しかられるだろうな。	
3 二人で雑巾を作ることにする。 (習と読の読4-①)			「ああ、いいよ。」	明 「痛い。」			- しがられるだろうな。	
4 なかなかうまくいかないうえに、弟の明がはさみで手を切ってしまう。 (思慮反省1-①)			うまくいかないなあ。 「だいじょうぶか。」 困ったことになったぞ、なくなよ。 しかられるだろうな。	母 「もっと大きなけががでもしたらどうするの。」			- 頼みにくいな。 - けがしなければ、	
5 母が帰ってきてけがの手当をする。 (思慮反省1-①)			ごめんなさい。	父 「お母さんの言うことを聞いていれば…」 お兄さんなんだから、しっかりしてほしい。		- 父や母に注意され、だまってうなだれていた広はどんなことを思ったでしょう。	- きちんと前もって頼んでおけばよかった。 - 弟がけがしたのは自分が悪い。 - ごめんなさい。	
6 父からも注意を受けひどく叱られる。 (思慮反省1-①)			自分の役割を忘れていた。 ごめんなさい。	父 「弟の面倒を頼むぞ。」 がんばれよ。		◎母が作った雑巾と、父の手紙を読んで、広はどんなことを思ったでしょう。	- ありがとう。 - お兄さんとしてしっかりしよう。 - 両親の役に立とう。	
7 次の朝、きれいでき上がった雑巾と父からの手紙があった。 (感謝2-⑤) (習と読の読4-①) (家族愛4-⑤)			お父さん・お母さんありがとう。 ぼくがしっかりして、家族の役に立とう。					

(2) 指導案
展開

主な活動と発問	予想される児童の反応	指導上の留意点・評価
<p>1 家族について発表する。</p> <p>○ 家族に心配をさせたことがありますか。</p> <p>2 資料「雑巾」を読んで話し合う。</p> <p>○ 雑巾を作ってもらったことを頼み忘れたことに気付いたとき、どんなことを思ったでしょう。</p> <p>○ 弟がけがをしてしまったとき、広はどんなことを思ったでしょう。</p> <p>◎ 母が作った雑巾と、父からの手紙を読んで、広はどんなことを思ったでしょう。</p> <p>3 今までの生活を振り返る</p> <p>○ 家族ってありがたいな思ったことがありますか。</p> <p>○ 家族のためにしていることがありますか。</p> <p>4 家族からの手紙を読み、家族について考える。</p>	<p>・遊びに行って帰りが遅くなったときに。</p> <p>・病気やけがをしたときに。</p> <p>・友達とけんかをしてしまったときに。</p> <p>・もっと早く用意しておけばよかった。</p> <p>・弟も忘れていたんだからぼくだけのせいではない。</p> <p>・雑巾を作るのは、お母さんなんだから作ってなかったら、お母さんが悪い。</p> <p>・きっと作ってあるはずだ。</p> <p>・昨日あんなことを言わなければよかった。</p> <p>・自分でなんとかかしよう。</p> <p>・なんでけがなんかするんだ。</p> <p>・自分だけでやればよかった。</p> <p>・弟にはやらせなければよかった。</p> <p>・弟のけがが心配だ。</p> <p>・早くけがの手当てをしなければ。</p> <p>・しかられるだろうな。</p> <p>・自分で作らなければよかった。</p> <p>・あんなこと言わなければよかった。</p> <p>・もっと早く頼んでおけばよかった。</p> <p>・お母さんありがとう。</p> <p>・お父さんごめんなさい。</p> <p>・兄としてお父さんやお母さんから頼りにされているんだ。だから、もっとしっかりしなければいけない。</p> <p>・お父さんやお母さんの役に立とうと思った。</p> <p>・おこづかいをもらったとき。</p> <p>・ほしいものを買ってくれたとき。</p> <p>・病気やけがをしたときに看病してくれて。</p> <p>・毎日忙しいのに心配してくれて。</p> <p>・お手伝いをしている。</p> <p>・お風呂洗いを毎日している。</p> <p>・両親が帰ってくるまで弟や妹の面どうをみている。</p>	<p>・欠損家庭の児童への配慮をする。</p> <p>・自分の行動や親の存在を思い浮かばせる。</p> <p>・範読後、場面絵を提示しながら発問する。</p> <p>・前日の夜に、母から注意されていたのにもかかわらず用意をしないで、遊んでばかりいたことと、親にはたよりを見せていたことの両面から、広の心情に迫らせる。</p> <p>◎ 広の立場になって考えることができたか。 (発表・観察)</p> <p>・自分でなんとかかしようとして夢中になっているために弟のことに注意がいかなかった自分に気付かせる。</p> <p>・昨晚の母親との会話を思い出させ、後悔するとともに母親の助けを求める心情に迫らせる。</p> <p>◎ 広の気持ちになって考えることができたか。 (発表・観察)</p> <p>・昨日の夜父からもひどく叱られたことを十分に把握させる。</p> <p>・忙しいのに作ってくれた母への感謝と両親の期待をとらえさせる。</p> <p>◎ 父母の気持ちを理解し、広の立場になって考えることができたか。 (発表・観察)</p> <p>・一人一人が心の中で自分の家族が浮かんでくるよう配慮する。</p> <p>・物質的な満足だけの意見に偏らないように配慮する。</p> <p>・家族の一員として役に立っていることを発表させ、お互いに価値を深める。</p> <p>・家族からの手紙を用意しておき、家族の気持ちを伝える。</p> <p>・返事を書く気持ちにさせる。</p>

(3) 授業分析

ア 感想内容の比較とアンケート調査

図1によると、授業前の感想では、段階Ⅱの児童が20人で全体の約6割を占めている。この段階では、雑巾作りを頼み忘れていた主人公の行動に対する批判、両親から叱られてかわいそうだという同情等の感想を述べている。段階Ⅲの児童は、親が主人公のことをきつく叱ったけれども、本当は大事に思っているんだという親の愛情への気付きを述べている。

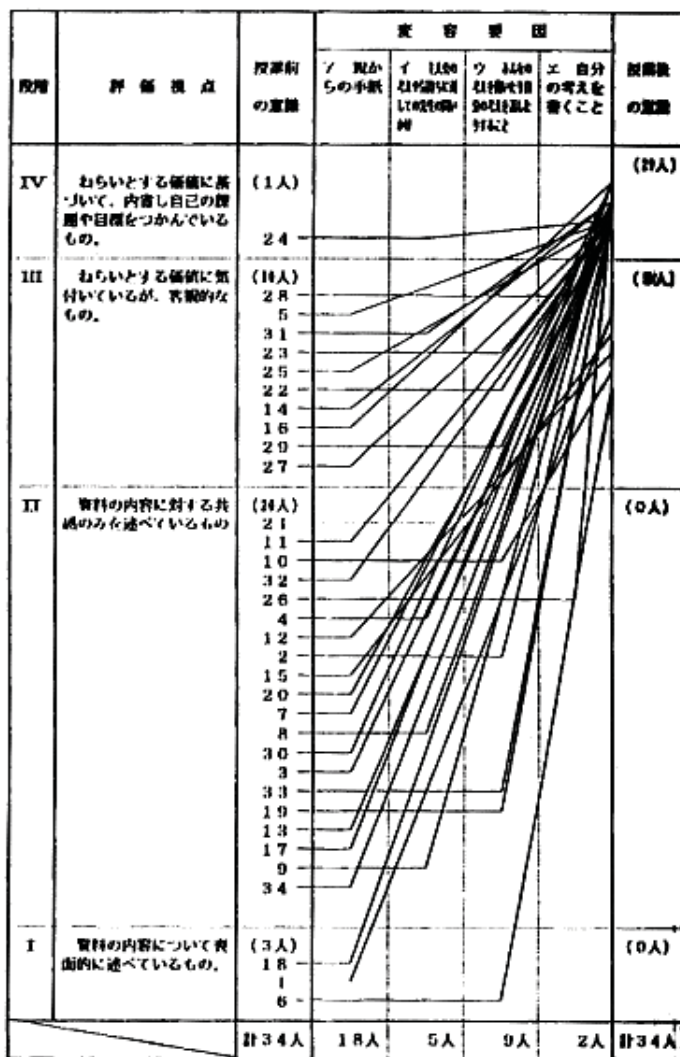
しかし、段階Ⅳの児童は、1人であり、ほとんどの児童は、家族の一員としてのかかわりまでは気付いていないことが分かる。

授業後では、全員の児童が、ねらいとする価値に気付き、より高い道徳意識へと変容したことが分かる。段階Ⅳの29人の児童は、家族のために手伝いをしたり、心配をかけないようにしたりしたいとの感想を述べている。授業前は段階Ⅰに所属していた児童も、段階Ⅳや段階Ⅲへと変容し、ねらいとする価値に気付き道徳的心情が向上している。

変容の要因としては、親からの手紙が18人と圧倒的に多いことが分かる。やはり、親からの手紙は、児童の心を大きく変容させる力があることが分かる。また、資料が児童の実態に即した身近な内容なので、主人公と自己とを重ね合わせて考えることができたためと考えられる。

イ 児童生徒の自己評価からみる変容

資料に内在する価値は、多様である。その中でも関連する価値として思慮反省や感謝等の価値をふまえて変容を見ることにした。図2の「親に心配をかけたたり困らせたたりしたことがあると思いますか」という質問では、「強く思う」と答えた児童が授業前では6人で、授業後は27人と飛躍的に意



(「授業前の段階」の数字1～34は児童の番号を示すが、出席番号ではない。)

図1 授業前授業後における道徳意識の変容とその要因
(授業前 平8.9.20 授業後 平8.10.22 実施 5年1組 34人)

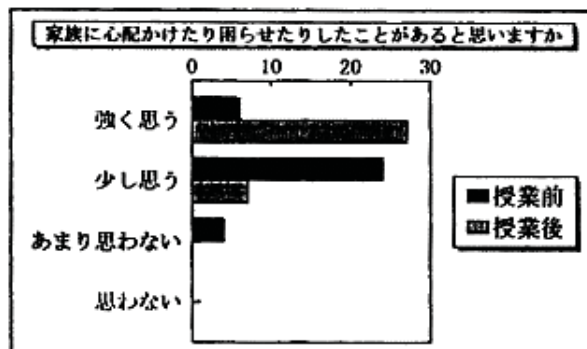


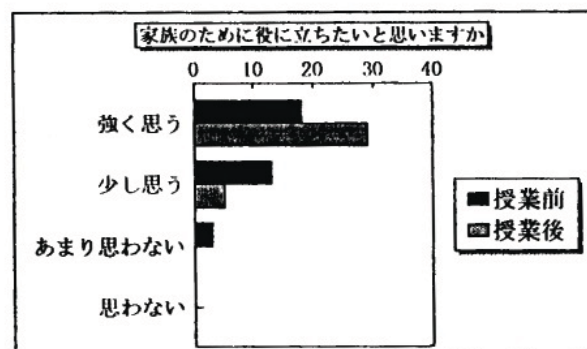
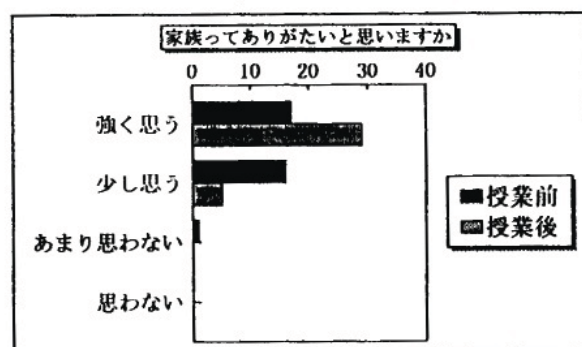
図2

識の高揚が見られる。図3の「家族ってありがたいと思いますか」という質問では、「強く思う」と答えた児童が、17人から29人に大幅に上昇している。図4の「家族のために役に立ちたいと思いますか」という質問に対しても「強く思う」と答えた児童が大幅に増加している。授業前には、「あまり思わない」と答えている児童が数人各項目に見られたが、授業後はいない。

したがって、ねらいとする価値の家族愛についての学級全体の意識は、道徳的価値の高い位置に変容している。

ウ 児童生徒による資料評価

表1では、31人が資料内容について、「よく分かった」と答えている。したがって、児童にとって理解しやすい内容であると判断できる。「どうだったか」との問いに対しては、「やる気がおきた」が25人と道徳的実践意欲の向上が見られる。また、残りの9人は、「心に残った」と回答し、児童にとって印象深い資料であったと判断できる。授業後の感想に、類似体験をあげる児童も多く、児童の実態に即した身近な分かりやすい資料であったため、共感的にとらえたり、自分を投影したりしやすく深く自己内省することができたと推察できる。



(平8.10.22 実施 5年1組 34人)

図3 家族愛に関する学級全体の変容

表1 資料内容に対する児童の感想
(平8.10.22 実施 5年1組 34人)

《どんな内容だったの?》	《どうだったか》
・よくわかったので (31人)	・やる気がおきた (25人)
・わかりにくかったので	・やる気がおきなかった
・よくあることなので (1人)	・心に残った (9人)
・あまりないことなので (1人)	・心に残らなかった
・体験しているので (1人)	・体験していないので

3 成果と課題

(1) 成果

- 資料内容が、身近なものであったため、児童の内容把握を容易にし、主人公に自分を投影して自己内対話を深めることができ、ねらいとする中心価値に迫ることができた。
- 資料を生かした展開の工夫の一つとして、終末の親からの手紙は、親の愛情の深さを児童一人一人の心に強く印象づけるとともに、実践意欲を高めることができた。

(2) 課題

- 多様な価値観を引き出し、内なる自分や友だちとの対話を通してねらいとする中心価値に迫ることができ、道徳的実践力を促す資料づくりを一層進めたい。
- 資料を生かし、一人一人の心に迫る発問や価値への方向付けを工夫することによって、自己との対話をより豊かにできる授業の展開の在り方を究明したい。
- 児童の意識の変容をよりの確にとらえることのできる評価の在り方の研究を進めたい。